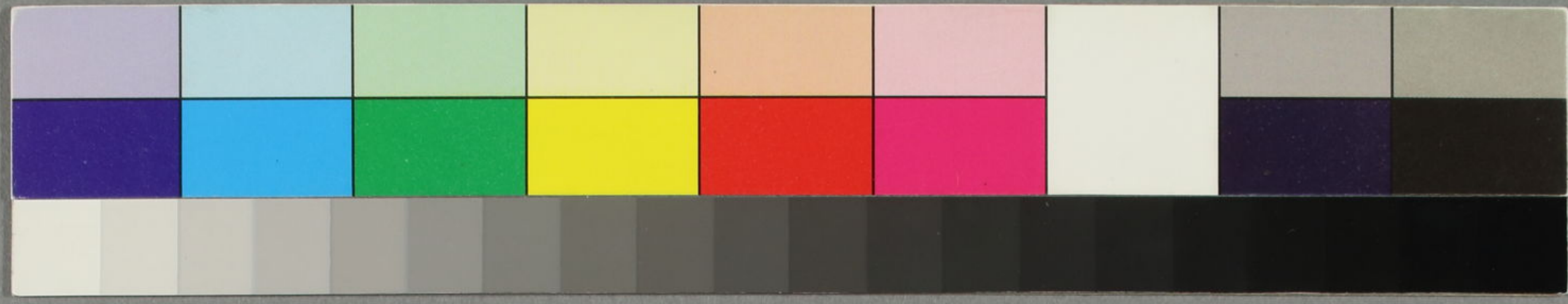


役者評判記

千13  
3849  
114







安政三  
丁辰春

後者雪月花<sup>京</sup>上

~~手多~~  
1099  
32

特  
手13  
3849  
114





門 13  
流 卷

没者雲月苑

舞 亦



除却 江乃 行 の ころ 雲 月 苑  
二 卷 の う ま っ 十 と 雲 月 苑

と せ ん り ん の 女 たり 母 子 と  
村 代 の 仕 分 り 一 人 づ づ づ  
仕 組 づ づ づ づ づ づ づ づ  
ら づ づ づ づ づ づ づ づ  
上 づ づ づ づ づ づ づ づ  
が づ づ づ づ づ づ づ づ  
候 づ づ づ づ づ づ づ づ  
よ づ づ づ づ づ づ づ づ



八かぐらゝん<sup>ひらき</sup>と<sup>ん</sup>思<sup>ん</sup>負<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>氣  
 巾<sup>ひらき</sup>の<sup>ん</sup>見<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>俾<sup>ん</sup>たり  
 た<sup>ひらき</sup>と<sup>ん</sup>出<sup>ん</sup>切<sup>ん</sup>あ<sup>ん</sup>  
 と<sup>ひらき</sup>ん<sup>ひらき</sup>と<sup>ん</sup>せ<sup>ん</sup>が<sup>ん</sup>そ<sup>ん</sup>の<sup>ん</sup>氣<sup>ん</sup>後<sup>ん</sup>の  
 件<sup>ひらき</sup>あ<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>し<sup>ん</sup>あ<sup>ん</sup>串<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>此  
 ニ<sup>ひらき</sup>と<sup>ん</sup>あ<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>ま<sup>ん</sup>な<sup>ん</sup>製<sup>ん</sup>昌<sup>ん</sup>大<sup>ん</sup>  
 と<sup>ひらき</sup>と<sup>ん</sup>終<sup>ん</sup>さ<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>並<sup>ん</sup>ふ<sup>ん</sup>あ<sup>ん</sup>る<sup>ん</sup>月<sup>ん</sup>を  
 の<sup>ひらき</sup>あ<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>そ<sup>ん</sup>が<sup>ん</sup>海<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>野<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>  
 か<sup>ひらき</sup>と<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>

あ<sup>ひらき</sup>と<sup>ん</sup>又<sup>ん</sup>店  
 一<sup>ひらき</sup>と<sup>ん</sup>と<sup>ん</sup>

系大城を立形取役者目録

系藤<sup>早中</sup>御<sup>長</sup>系<sup>吉</sup>系<sup>夫</sup>

同 南<sup>郡</sup>御<sup>方</sup>系<sup>右</sup>系<sup>天</sup>

○凡そ<sup>布</sup>の<sup>袋</sup>も<sup>名</sup>取<sup>役</sup>と<sup>り</sup>た<sup>の</sup>と<sup>り</sup>

△<sup>い</sup>平<sup>下</sup>あ<sup>の</sup>時<sup>体</sup>と<sup>り</sup>旅<sup>の</sup>の<sup>役</sup>と<sup>り</sup>

▲<sup>五</sup>役<sup>名</sup>也<sup>姓</sup>

至上書 尚<sup>天</sup>傍<sup>天</sup>寛<sup>天</sup> △

▲<sup>五</sup>役<sup>名</sup>也<sup>姓</sup>

▲<sup>五</sup>役<sup>名</sup>也<sup>姓</sup>

大上書 尾<sup>中</sup>上<sup>右</sup>多<sup>左</sup>分<sup>右</sup>尾<sup>左</sup> △

▲<sup>五</sup>役<sup>名</sup>也<sup>姓</sup>

▲<sup>五</sup>役<sup>名</sup>也<sup>姓</sup>

大上書 三<sup>中</sup>井<sup>右</sup>大<sup>左</sup>以<sup>右</sup>席<sup>左</sup> △

▲<sup>五</sup>役<sup>名</sup>也<sup>姓</sup>

▲<sup>五</sup>役<sup>名</sup>也<sup>姓</sup>



至吉

実川延三郎

△

かき中書頭てうろふ三井店

至吉

岩橋隆山

△

三井店

上吉

尾上松寿

△

三井店

上吉

三井梅舎

△

三井店

上吉

尾上松縁

△

三井店

上上吉

市川隆十郎

△

三井店

上上吉

中村乾彦

△

三井店

上上吉

三井福九

△

上上士

中山文七

△

三井店

上上士

三井源助

△

三井店

上上士

尾上多麻尾

△

三井店

可離助

△

岩橋隆山

△

坂東玉三郎

△

中村為三郎

△

岩橋隆山

△

三井代八

△

市川後猿

△



上上

実川延次郎 △

市川九松 △

中村秋十郎 △

上上とてこれいかに云々

坂東秀洞 △

市川新太郎 △

中村喜兵衛 △

多岐公とわらひく 藤門

市川末花 △

中村栲翁 △

中村政次郎 △

片屋源三郎 △

中村豹三郎 △

上上とてこれいかに云々

嵐芳三郎 △

上上

市川壽吉 △

市川園三郎 △

中村多九郎 △

嵐園栲翁 △

法村流三郎 △

市川泰三郎 △

浅尾市松 △

これとてこれいかに云々

実川実兵衛 △

片屋柳翁 △

三井大次郎 △

嵐権翁 △

中山栄三郎 △

三井福七 △

上上

これとてこれいかに云々



至<sup>石</sup>上吉

▲床飾三後対

市川園芸 小

とやまのねをたてて久しう 藤田の 虫の音

真上吉

市川助三郎 △

川平の別てつらう 女中

至<sup>方</sup>上吉

市川銀十郎 も

毎と氣のよき南のり 天夜 吉田市

上上

中村玉七 △

おりのぬれをたてて天保の

上上

尾之和市 △△

市川市松 も

依りかかるとてん成 自覚の 妙見

▲実西後見

大上吉

市川市松 △

川平の別てつらう 女中

至<sup>石</sup>上吉

▲実西敵後道外部

中村友三 小

ひらりゆきと服さる 大川の 花見

上上吉

中村雀太郎 も

ねまのよきひのり 細毛

上上吉

中村仲助 小

きかぬのよきしと 大川の 花見

上上吉

市川冠十郎 △

市川冠十郎のよき 大川の 花見

上上吉

中村文次郎 も

市川市松のよき 大川の 花見

上上吉

市川市友 も

市川市友のよき 大川の 花見

上上吉

市川市友 △

市川市友のよき 大川の 花見



上上吉

相寄山六 △

余り無事なりと云ふ事あり

上上吉

浅尾宿市席 △

浅尾宿市席 △

嵐倉九 △

浅川宿市席 △

浅尾内也 △

中村款市席 △

高川宿市席 △

実川大八 △

行尾宿市席 △

実川龍虎 △

実川景虎 △

吉野宿市席 △

これらも皆無事なりと云ふ事あり

上上

上上

上上

上上

浅尾五六 △

嵐倉三席 △

行尾宿市席 △

中村款市席 △

市川三席 △

中山百席 △

お出せとわがひやく 浅尾宿市席 △

嵐倉大十席 △

実川正七席 △

中村り三 △

中山仲虎 △

市川助八席 △

行尾市九席 △

大谷後虎 △

これらも皆無事なりと云ふ事あり



上上

坂田九國 市

浅尾為壽 〇

嵐野又市 小

嵐野幸茂 〇

市川助六 〇

市川多羅枝 市

市川玉十郎 〇

市川服八 〇

嵐野定次郎 〇

市川多喜 市

三井めづる 〇

市川多喜 市

▲若女形志保

至上吉

尾上栄次郎 〇

市川多喜 市

至上吉

▲若女形志保

山十金作 〇

市川多喜 市

▲若女形志保

至上吉

嵐三三郎 〇

市川多喜 市

至上吉

中村大右 〇

市川多喜 市

至上吉

友川友右 〇

市川多喜 市

上上士

尾上いねは 〇

市川多喜 市

上上士

市川多喜 市

市川多喜 市

上上吉

市川新車 市



上上音

竹屋お助

△

右の音にて孫のやうなるは  
うらうらひとのやうに  
はる

上上音

沢村其春

△

あふらしてまゐるよの  
はる

上上音

中村千之助

△

十のやうなうらうらひ  
はる

上上音

尾上芙蓉

△

これよく奥のうらうらひ  
はる

上上音

中山一徳

△

上をうらうらひのやうな  
はる

上上音

中村梅丸

△

あふらしてまゐるよの  
はる

上上音

中山冬三

△

陸分音のやうな  
はる

上上

嵐橋梅

△

尾上番初

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

上上

山

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

嵐橋梅

△

上上

上上



上上

- 市川等々 △
- 市川務等 △
- 沃村三村 △
- 中山みか △
- 中村款三席 △
- 浅尾里 △
- 中村と △
- 山岡冠 △
- 三井 △
- 中村 △

上上吉

- 実川南 △
- 系女形 △
- 中山南 △

大上吉

上上

- 市川孝 △
- 市川全 △
- 市川 △
- 尾上 △
- 実川 △
- 中山 △
- 中村 △
- 実川 △
- 市川 △
- 市川 △

角發形部

山梨のての風下り

雲

市川



上上

三井竹安齋 △

三井源安齋 △

中村橋之介 △

三井源安齋の六右衛門

▲別頭

真上書 中村秋六 △

中村秋六の書

▲五類

森本春書 市川清老齋 菊

市川清老齋の書

▲頭取之部

小例

市川團六

嵐寛之助

尾上友助

辰屋長九郎

南例

▲雜子之部

小例

一長頭花房才七 一降ろ竹本三木美

一三法坂東定齋 一三法つゝ法和布

一長頭花房花好 一降ろ竹本打妻夫

一三法梓登心陸 一三法つゝ法照造

南例

一長頭花房才七 一降ろ矢行富美夫

一三法梓登心陸 一三法つゝ法和布

一月小初倉才七 一降ろ花房才七

一書中村院屋 一三法梓登心陸

▲在言化者之部

金史朗

小

宗行七三郎

宗行正三



側

赤門三七  
金剛女  
炭琴若助  
赤門山坊

南

清水先勝助  
赤田左衛門助  
清角山介  
成田和助  
清角山若助  
成助七  
玉屋玉助

側

千手龜万葉集

叶

安政三卯二月十三日往生 尚時坊住 古大破

妙宗院高林三光日暉住 山法吉

俗名 中村富十郎 行年 七十七

○極楽往生歎ひぬ死四天まきの引舟鐘

既記抄に云く幼年市川慈孝所より故人  
市川甚之助ありて後故命村被改  
史門中と云中村三光と改名後松江改  
名と後乃の留ありて天保己年二代  
目中村富十郎の名前を續行され其  
子三郎一の若女形の数親出か述中と  
所記に云くも 所記儀様の以替を若  
也く坊表へ住居を委せ其所居地  
七も其く其乃又の系然も其出勅所年  
以系の記表あり被地も其大評判大  
七も其く其乃又の系然も其出勅所年  
七も其く其乃又の系然も其出勅所年











義評の任納と云ふ事ありしを以て  
トキニ召りし者積業は世にありしが  
乃ち跡ら道に海老花火のりて  
室におつといふを以て  
とが二遍の四回と稱す

安政三年卯七月十四日

當岳路山信士 榎幸坊

同 九月十三日

明心院花光日定善信士

信名 大谷廣高

信名 中村桂車

信名 中村万六

信名 後川花曉

信名 後川務志

右に引れしものより二遍の四回  
お祈りし上あり

色役巻頭

至聖書 崑崙寛

至聖書は葉村也嚴師也云々

又年次表に表あり彼地を

評判あり別名女歌と云々

加記業若は又年次より

示るるに及意地の定日

中を東堀川中の旗ひり

中を積物杖と積多き

中をむらひおごを笹原

中を始いは思出と川竹

多花連生おひを連中

のいひを船資艘より

毎万燈の燃灯より

之を人元五年締込











物が初めの出でる弁（一）色は度  
張る加うかきしきあるが統之他法  
がふき大序の老流中き出さるる成り  
更見物ももの同しき連ふ成誅之類の  
いさでや弁はとある本物の取方なり  
たう弁太序よりき君教指のよき張  
又物かほのく弁程家の筋もは色後  
のそ更もふ揃うり遊ばわゆるまき  
ての弁木うり役の又勤て初うり弁  
段のなかでや弁松お史うらげ皆統  
ころのそや弁二初様を此物らら方留  
よく焚き小あうりあうりは方なり  
かすうぬのきはははかうらる役で  
さう弁はたう三様ははきありの本  
るるまひぬ城とあひ双方をきあ方も

戸田流の連ふあ人のぶうりそれより  
名案合をきあめだりける月九の  
庭と持中りは方お持せり（一）  
お持せりお運せりあぬが丸でぬ  
の運井村の谷あを張せり（一）  
海田といふ勇まといふは死てま  
成置成りて核播の上退後りけ  
たりしこのあ人の界なりん物統  
又悦びきこまて（一）千日うの  
版をきあり村のぬまうりあへど  
お持せり甲後をきあ父の横死りの  
あり村と安所もああ人のうりあ  
切てりるせよ孫り人のぬ様出たの  
いあははまて扱き絶よりいあど  
組合ト付ある取百村たこまらひ



































將安と云ふ事ありあるに幕中の入ん物  
一鏡状の事と云き二取向の枝突中  
さうしを鏡子の取まへる事と云  
傳まらぬもの事と云ふ事と云ふ事  
南枝突更なる事と云ふ事と云ふ事  
それが坐る事と云ふ事と云ふ事  
物初めの情と云ふ事と云ふ事  
對面の方と云ふ事と云ふ事  
仕立の事と云ふ事と云ふ事  
のむけ分と云ふ事と云ふ事  
裁奪と云ふ事と云ふ事  
うり事と云ふ事と云ふ事  
中程の物と云ふ事と云ふ事  
末更と云ふ事と云ふ事  
く

か入る事と云ふ事と云ふ事  
此合の事と云ふ事と云ふ事  
さうしと云ふ事と云ふ事  
凡物と云ふ事と云ふ事  
此合と云ふ事と云ふ事  
花乃の中程と云ふ事と云ふ事  
大の事と云ふ事と云ふ事  
さうしと云ふ事と云ふ事  
か入る事と云ふ事と云ふ事  
運入る事と云ふ事と云ふ事  
市友と云ふ事と云ふ事  
のひと云ふ事と云ふ事  
後と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事  
表と云ふ事と云ふ事



縁小内へ出入るる小者と比合たる共中  
 かると三人よりのりば物百のりち大伴  
 判てりせそ後所中より所がたを  
 尤りちと後亭主権并実房の如き  
 此の名案をる方ちを大あうとごう  
 ちとあうかあへは腐はあな限り并  
 大に死く[**既**]それ故をどりうひ付を  
 かりこ[**ト**]キマト承知ども[**既**]三の  
 ろり同社と老の記小田長永中[**物**]  
 大席は合舞の場所が長永の由光  
 兼との中合秋をといひのり兼九段  
 麻ら打むる方めり[**既**]若下と  
 といは長永中の親父あつりの程は別  
 と此の長永といひは親父あつり後  
 はあもてこの海り能り万端ありあけ

是とのりちとあま[**ト**]上層もあど  
 細今ゆ表たるはあはあやの延美史  
 ちけりあくとあひの介ひあや中せひ  
 辨念く[**物**]二原目家あまの鹽の酒を  
 吞との秋修のり親父の傍もあれど  
 何分喜次チトあ評とらりこの後光  
 の交違るるちあまを安念かろあま  
 ち評とらるり[**既**]二やあ光法師  
 [**既**]あはあは元年國出史あてと  
 相合の國出史の宗有とまよとあま  
 白背のかはまの原中ちあつ相合を後  
 角打るる報とあつ相合のりあつ評  
 はあの延美史もは家有遠ひといひ別を  
 法光宗のりあつちとあまのりあつ  
 あ評とらるる相合の延美史有違記け



目達上人の法衣をよそ太入の法衣に替り  
かちかちの法衣に替りし月命りかきぬぐう  
又作著衣身返役と割出とのが麻お  
それゆゑ三限目別への其方端をうり  
よ七段の麻が仕向にうりたるものあり  
たかしの評判をよ評せしむる評を  
[段]二や三其衣之者九段目か平次思の  
ぬききり出さくか平次思の法衣にて  
を具置機入引とむなる後状を平  
次ゆゑひきりと改めく氣のうりめ  
かちかちかか太入の四段目麻長柄  
いものやまま上の法衣にて評せしむる  
かせあふ中の法衣はかこの法衣をうり  
評せしむる評せしむる評せしむる  
大切近江八条の法衣はかこの法衣

るく[段]中程を深機操を付せし山  
家や法衣を替りしの中程をうり  
替りし法衣を替りし中程をうり  
かちかちかか太入の四段目麻長柄  
いものやまま上の法衣にて評せしむる  
かせあふ中の法衣はかこの法衣をうり  
評せしむる評せしむる評せしむる  
大切近江八条の法衣はかこの法衣

角の法衣中程をうり  
終休日成す  
七月















氏船六丈の船尾の操舵と云ふは  
大旗の仕業と云ふりたなりといふより  
双方揃て写す小糸をねどゆふに上を  
曳きると云ふことかひきと云ふに  
清み船状を別物の物一統と云ふこ  
初まりと云ふ船や場所を云ふ保場と  
する事ありと云ふ事と云ふに  
不辨と云ふこといふこと地蔵のほかみ  
のことと云ふことか場をいしてよるこが  
持是すと云ふと云ふと云ふと云ふと  
[歌] 大切女陣の末 [歌] 西能が云て  
た金の怒り付りあつてつらうり煙を  
られやうと云ふ後世の物語と云ふ  
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

後世の白めき花たよりの出るなり  
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
のわに神ありと云ふことと云ふことと云ふこと  
切りたりと云ふことと云ふことと云ふこと  
中と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
師匠と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
[歌] 志趣くむと云ふことと云ふことと云ふこと  
か接と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
肉信若君の依ての坐すれ分頼と云ふ  
撞と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
陽世と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
の弁と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
か、頼と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
念く [歌] 二年晚君信と云ふことと云ふこと







市瀬へは出動浦船勢に網丁を三集浦

川西松まとの必合のりそふふざり外こ

賢二や小別借内は年大坂表がわ勤

内ノ展みまおれた返のふまきカカガ

川口辻堂の場大表史かまよとの史合もく

宿や場をカカガ

賢二切程を公を史合よ

妻はし大坂と同伴心カカガ

大みは同伴も安業種、筑屋三才

うろかおやカカガ

まれのく孫まきまをま切偶同月

法書坊川西はカカガ

付る程大切取作のまカカガ

それ分七月角の徒の出勤カカガ

石井源流中場二取月為十史史

継平とまカカガ

く七れより延三史や飯田中まカカガ

倉より宿より父の横死と史史

方とカカガ

方久がのれ同伴史史

かあてえカカガ

見切若助史史

場高りがてよカカガ

考のま史史

互迫りおカカガ

中史場史史

ろカカガ

よ史史

史史

カカガ

カカガ

カカガ















時ひあのてりあつてや上秋の内かきか  
切程今織上布仲る信女とて海屋  
又長分の者もよとてか長一帯に仕ら  
申くともかされ生さ八月替り申の社  
出動肆曲考さゆゆは進給なとて  
他女切襦袢を筆物二つに替りて  
至徳を檢校とて入申せ見ゆる  
時あめを中とてさうかあふりて  
信分を檢校かゆ大長指の筆物  
とて中とて或乃やいはる所よと  
再のさつぬか念くそ松おは因  
傍表の出入ぬ巴以下長表若  
二やとも伴く切高職を獄い  
あひの介おぬとてかされ切  
かかちせと申とて

上上吉 尾上松緑 △

際相はあが太極やあてりあつて  
のりり京水例芝あつて二世は京  
他天邊坊あつて指三布の  
意流とてあ金のあつて  
とてされ所とて後法友の  
とんとたぬあつて  
うのさぬとて念く  
といのり外Eキヤ松緑

上上吉 市川松千舟

角のたぬあつて  
あ二やぬあつて  
策多りの名ゆり  
たてあつて









京四條北側芝居三  
歌詩山殿流寫



後狂言  
軍法官富士見西行  
深損様妹来宵門姿



切狂言  
彫刻尤小刀



京四

京四







申之申く初平の八郎がうぶに後切杯  
 めのそをせりせりやうと夫後を後七  
 さうとをせり切六教他地能の天候をも  
 お勤大御刺でうぶこそ其夫大令をせ  
 ちうと令執者其のおまがく〔賢〕又  
 府都りの養老文其の山出勤意信探ふ  
 物行をう探う二申作後を九の天  
 味及物でうやうと切六を案を信本うあ  
 さうとをせり何のまが其成約やくと怒  
 うぶをとおはせせ〔善〕切粒を房  
 智と派むの活他三様はとのまがう  
 お違考く〔賢〕中違う延着は病  
 氣え又人男のうう殺へんはうとわぬ  
 評がよまがうぶと七月替りお後  
 其のへ山出勤の善報と國士をうま

おやぶの信を切綴をたをこや赤八  
 八十二度武た火をのまのせり〔賢〕誠  
 又遠入んととをせり〔賢〕其神後  
 懐改と助はむとを後録め令  
 くらうはるもお鳥とでたやう〔善〕  
 二申道入のおお代はまをぬれ  
 のる〔賢〕伊が下お取あむがへ  
 申二申待形ままおまはれ骨と持  
 二百五の令とらうとをまはまてま  
 うぶと後大河の山前らうとらうと急  
 白痴のるよ厚と大やあれと出るま  
 一と〔賢〕次がたおまかまの天守〔善〕仕  
 用とや多のあがどやうと神がうぶと〔善〕  
 そらうかまの仕合あ小は利き又伊の  
 よく録十節の山後をえおとらうあお鳥























無心無智良女大序為十前史  
漢波之介又待之者多富を以て  
心よふ中しと猶や政政さしと云  
もの中をあんごそ松中此た山出勤  
是花結合を名たや山平中お持あ  
中かあく出来きしと因うは世出勤  
か其務は徳方の切考ら何中て云  
お徳こもさるれどと云云兼登満く  
今別増たのされさきると以上達の  
聖者おん心より亦た七喜八知た光  
子下服さぬい花くしんると待やんく  
[トイキ]ヤレユマ其も増たんく

△以外の三殺元中入の目録之代也

殺者をも待たんと云也





安政五  
丁辰春

後者雲月花  
坂大  
中

~~手多13  
1639  
33~~















のころ大務をやりしに 既 西の月を  
系少く又山出勅出殿流流と長長を考  
川 西大岸仲助共流流と御々らう留  
進人と刀金ととそれ分新 村に侍るに  
ヤ分の加着 西 三 西 三 西 三  
多系彩々内殿者々と振ると西三不  
振始終氣と行らぬ人後障障等の  
三三三の三三三もよく西三の三三三  
少り 既 西三西三西三西三西三西三  
西三西三西三西三西三西三西三西三  
條の既既既既既既既既既既既既既  
れり 既 西三西三西三西三西三西三  
各うかあや 既 西三西三西三西三西三西三  
年中おとと様よく西三西三西三西三  
わら 既 西三西三西三西三西三西三

妻もあつとさかたてて武乃やくと  
おの 既 西三西三西三西三西三西三

▲ 五 役後見

真主書回市川助藩御

既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
七 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
く 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
侍 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
戸 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
後 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
の 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
彩 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
西 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
の 既 西三西三西三西三西三西三西三西三  
又 既 西三西三西三西三西三西三西三西三



西陽宮内親王 元興 才不入内侍殿をた  
見へるやうに 元興 法皇の御母が御母  
又近江七郎も中ふふ 元興 元興  
あそび様もすむ 元興 元興  
中ふふ 元興 元興  
見の御 元興 元興  
物あやう 元興 元興  
まお 元興 元興  
例 元興 元興  
物 元興 元興  
ま 元興 元興  
大 元興 元興  
主 元興 元興  
新 元興 元興  
お 元興 元興

隅田川は浅山を指す 元興 八月が  
ころ南の行名 元興 元興  
大 元興 元興  
あ 元興 元興  
つ 元興 元興  
の 元興 元興  
あ 元興 元興  
と 元興 元興  
二 元興 元興  
を 元興 元興  
四 元興 元興  
七 元興 元興  
助 元興 元興



























うりうりのそらうりこそよき後お救ふ流に  
大さき陣とく後の井持八と名のり二階又  
ての大さお殿と自堂自堂のつれあひをう  
大さのそらうり〔五〕又月替り流後のま  
あは出勅侍雲龍と答問内記〔三〕人  
との衣服は出改たつと傳換の事も候分と  
為対てよとあされやと二やかよ流後の  
服揃丸女多きとの史合流後たよまか  
るてそらうり二付内もたよとあうり〔五〕  
流とさうりの方何よりいふとが月替あひと死  
ふやうとそらうり今別女の情とよれにて  
初らうり〔三〕流とあ若年と相合ぬ流思とく  
賢〔一〕それより又鳴市並張おりの信持よ  
てもいふと大かとも勅侍の介侍とくおま物  
くく流後あひと系は條お例へ出勅とら

輝双紙ぬ麻〔四〕川〔一〕柳〔一〕方〔一〕輝とく系  
切別と大さのそらうり二切極珍とよ代  
流とくとあひかるのそらうり〔三〕賢〔一〕それより  
以流後あひと若き史多指ぬ出勅輝双紙  
ぬ麻と流とく二陣とく双紙とく小致詞とよ  
こ〔三〕懐流とよとあひととの史合流後たよ  
見知らうり大さのそらうり〔三〕切〔一〕老切  
元十流月と武智とよとく〔三〕賢〔一〕休とよ  
まのあひと流後あひと若き史多指ぬ出勅輝双紙  
ぬ麻と流とく二陣とく双紙とく小致詞とよ  
こ〔三〕懐流とよとあひととの史合流後たよ  
賢〔一〕それより台庫とあひと同柱とよとあ  
流とよと流とく近年の大かと金とよ七史の  
おま物とくあひと若き史多指ぬ出勅輝双紙  
ぬ麻と流とく二陣とく双紙とく小致詞とよ  
こ〔三〕懐流とよとあひととの史合流後たよ  
本下流とあひと流とく〔三〕賢〔一〕休とよ



























秘のま切意通中村新多彼比も道  
年の大入を在方はのちも扱へ盆が中  
の庄音聞ぬ繩平海波山平と七律也  
律のりもろやむ切意と長尾浪案  
律とそれ分心海波と疾山出動かた  
久以て感言者とうとふは依及  
七去依と言はし中申ふ律とら申と  
仕用や分ふかこれ中在方はのち  
てふの秘ぬ意とあつて一と律  
一の谷と屋敷と六律と物と款設より  
後と出れぬ意はあや迎もとら  
又分七律念く二申とらふと六申  
く二代務員附の鬼ヶ嶽[善]はや八  
師匠の秘在は申年のもり海波と師  
匠の意とを治れとあれとふ律也

中一切律意州と二律判の言も若本  
と七律在は景棟と屋のりも一と  
あれとら言と[良]尚も律と  
例の山出動と後山は律と振も  
[良]二申ともいふとあひれ外律と  
若本律と法花長と律川原と二と  
た大坂意と仲女史の言と格別也  
との中と意と本律とあつて二と  
意と律とらと[良]と新律と  
上吉 中村仲助  
[良]扱は山形松尾とは七と并は年  
の戸表以後律と之と後意切であ  
そよ并意律とキザのあつて分来  
のいおとらと并とらとらとら  
是の律とらとらとらとらとらとら



撰てより外七月替り統後皇孫  
 出勅言音報後土衣山いごと  
 のおけ分お替りともれり一切大行  
 又月之法花長之後川源十の  
 親十并史将を之助との後合や分  
 石切著せり趣付分良者史跡川史を  
 後若との伴てより外 既 松加分を  
 月係系「」を「」の谷を系系  
 又年伴より二代務負附と本村を  
 さくとれよ先二代務負附と  
 九員が一の商りてより一切名神  
 鞠を深徳を指すてや多か  
 う后をせ系少く入出勅皇孫流  
 皇的欲依く本が流 本 本  
 名そ「」と「」の向余傳又たの

小伴りよりより「富士見西行」  
 亦後めより「」を「」を「」を

上上吉  出見冠十帝 △

既 具足や史をより外を身入る  
 くのいりて「」を「」を「」を  
 替り統後皇孫流後水秋月大  
 本園の二や 切二や 度たを  
 切つきの端小字向なる 他り  
 万端や各の、史を「」の「」  
 後川裁を「」と「」を「」を  
 史二やとも「」を「」を「」を  
 既 史物分「」を「」を「」を  
 史二やとも「」を「」を「」を  
 の史を「」を「」を「」を



















こころの中の子を撫と静に承け  
[夏] 子に山の辰花乃公の女に似  
く後為世に軍務候の事も之に  
所敷場所を徳とらふに報志を  
らるるめめをさすて記すに切敷入候  
に女付も政これをも中[夏] 夫  
京市例芝居に出勤浦納常おさま  
の方娘をも[夏] 二やた方おたふさ  
[夏] 七れれ物地ら南の産をぬかひ  
の方やく[夏] 二限目十九の産を  
多後は[夏] のむれとあはらるる  
さるとれどがらやととて[夏] 二や  
さ[夏] 遠く[夏] の辰係を  
合及後のもめめをさすて記すに切敷入候  
源流も胎らぬ方とらふに報志を

る留よりありすと[夏] を後さ  
以病を言ふ類にせしも系例も  
出勤ありとて[夏] 二やた方おたふさ  
待すなりと[夏] 二やた方おたふさ  
をまさんて

上上吉  中村大者 △

[夏] 叔は家か八樓やの太きまを  
あま三の習り南の社當玉免國舞  
のま[夏] 幼少の少女[夏] 幼少の少女  
秋外史虎九と[夏] 幼少の少女  
とら加らととらまら[夏] 幼少の少女  
やまの[夏] 幼少の少女  
よお家分を[夏] 幼少の少女  
舟史の死去と[夏] 幼少の少女  
とら加らととらまら[夏] 幼少の少女



勇女といふは伊豆守と伝ふことと  
 知りて小つらつこの後世にやうかやう  
 はなれり外太死〔説〕三替りき切  
 記義探〔切〕殺の辰光素ふ因事  
 知りて事おききとれ世のさかん  
 うらふる世家世の女成と云ふこと  
 かみりし〔事〕赤平路内の辰国母  
 こそ其光素素武共とあり美人歌  
 久合は世の仕月人形の身成りそめま  
 お出まてつりやうと由ははきまめつら  
 抱き上りめが刃てえしと今初は幸抱  
 と成りて思ふはすあり若女形の大  
 抱あつらふ今の思〔切〕後出素の  
 情を空に望む合懐は後世に切後れ  
 るまひのるたふてこれ林と大あつら

〔説〕それが系は條も例へは生勅と源  
 船勇方娘とよ女かおき切は〔説〕權  
〔川〕三つた太きと解く後世は源と娘  
 みさ月女かおきとこころは素素侍  
 助命女成おき〔川〕よふあこれす一切  
 備内川はかきとあらういふことと〔説〕  
 を後には素素おきり彼地も太きと解く  
 是地は素素おきいふこととこのは素  
 多りすこととれと多の思ふことと何れ  
 多くは後世にやうかやうは子房を素  
 ち介はのお勅と移りおとこころの  
 八腹をの太きとんことと

上吉  後川友者

〔説〕おはまか後川の太きとてつり  
 素素二の替り中世は又十三替りけのせ







傳燈史交々との出合を伺ふとて  
 くりまゝに川に二重の垣を築きまゝに  
 せよと云ふもあつたもろくもなれば  
 門に垣を築かば民お尋ねて言はれ  
 是を以て今別を築き入て去る  
 恨多しと云ふもあつたもろくもなれば  
 既言へば存ててもあつたもろくもなれば  
 ヤレエラ人全やぢしと云ふ

上書 回 市川新車 力

既言 叔澄のやのたまを多弁に決め  
 体利がよきうう弁を善流後継は水  
 らもはあはれいあつたもろくもなれば  
 何切がよの種女をたつと云ふも  
 三の替り千本橋との若すはあはれ  
 場三の中娘をたつと云ふ切止りの若あま

幼少のまは持をすしこもはあはれ  
 一はの海はあはれと云ふもろくもなれば  
 とうらんはあはれと云ふもろくもなれば  
 のうらんはあはれと云ふもろくもなれば  
 切止しと云ふもろくもなれば  
 若くはあはれと云ふもろくもなれば  
 物小断大やあはれと云ふもろくもなれば  
 くと云ふもろくもなれば  
 以月替り若をたつと云ふもろくもなれば  
 ば系と云ふもろくもなれば  
 かしき後流後を若報と云ふもろくもなれば  
 せよ流後切大行をたつと云ふもろくもなれば  
 それれ病氣をたつと云ふもろくもなれば  
 若くはあはれと云ふもろくもなれば  
 年の若くはあはれと云ふもろくもなれば



二代猪貞所安所おことごとくさし  
 切佛名軒に深川勢甚之安は系の初  
 やらばいとお業博の縁を切て金と  
 彩りつる勢甚之安の侍内を子  
 よふりやと〔取〕それる系も例に出  
 勤る流りたらしは厚くお捕の五仁や  
〔取〕さしおのりでもやまう切り流  
 るお勢甚之安も大坂をあらめお後  
 むこのさしやうとまふ又くお社を花  
 やうお養安がとつちもく

上上

尾上のりは △  
 市川壽美慈 △

〔取〕お安もおれを成る女形おれ  
 主候とんと申度出勤の縁甚長  
 むも流り流のりといか大やくわ

お勤おれを申してあつ評さうと出来  
 がく七代女形へ出勤の縁評と  
 のく申せふまふ申出勤の縁甚く  
 上上言 〇 所園遊の助 △

〔取〕お勤のたまふ申出勤の縁甚く  
 さうとまふ申出勤の縁甚く  
 流りもよくおれ申分大申うのり  
 申しおれは合せて甚喜流流流  
 う流り流り 〔取〕さしおれは合せて  
 申しおれの縁流りおれ進申流り  
 千本橋と女形小おれおその二やとも  
 本を侍之切教入流りおれ流りおれ  
 又このさしやうと又月より係勢甚女形  
 賜之いふと思ひおれよふれやうと二や  
 おそのお勢甚の流りおれ又いふと







あさくさくをりりおとく

上上吉 申村平五郎

既記 妻中の子は後内大臣の御孫を  
二重に侍りて岩屋下を姫お精切新  
妻中には多三の三つとてしるしを  
く大母とておのめ侍りて喜ぶ中府の  
おつと多と侍りてく

△はふの若女殿の屋中には長徳記を

上上吉 実川南次郎

既記 井筒のちまの七女おまき南  
の倉屋南玉をてま方実竹女おのこ  
後室みおんちを侍りて次お記は妹  
枝の戸女おおしづけ郎之指し福屋のお  
まのちうかお女お持てて又月終り若老  
女お若老侍りて定座の若おせうか

既記 戸系のおおしづけをては内  
若お若助妻お後室七とありん  
くお若中て二重に侍りて若お若の谷お  
中うかお女お多しお若中の子は若  
命を侍りて若お女おの七か二重も  
侍りて若お若老は若お若を并ぶては  
お外おおしづけの若お若も若お若  
かお若へは入る侍り外お若に若お若を  
中とて若お若の若お若を侍りて

若女殿惣後見

上上吉 中山南枝

既記 扱は若三女殿の若女殿の惣後見  
若お若の若お若を侍りて若お若を  
若お若の若お若を侍りて若お若を  
若お若の若お若を侍りて若お若を



角の當に先づ原史料一段目能多  
の物 **切** 延義史後巻く此の當合  
何なる史のさきとんと市村人見  
せりいなりむはと娘の仕内りん  
吾親の縁でやうりとうちのい  
女形もあはせりし出来物も  
市村之介を主国より悪者と言  
せんと長刀持様の字もあつた  
かたはく **芝** 山の内 **若** 氏程  
史料致しは史料後著書あり  
市村史は信内程を著しは西の  
物語のゆかり女の情もあつて  
料といふなりしやうりかか  
成に主事の事村也の事と  
七の故の原の史料は不  
なり

市村史 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
原史 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
其の **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
就 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
若 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
後 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
市 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
せ **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
日 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
知 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
大 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
さ **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
ト **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
評 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**  
廓 **二** 市村史 **二** 市村史 **二**



























大坂表より市交其やいなる悦長衣類  
其のつは谷をたかしく格別におは谷  
一のあつてつれと何とて成ても仇  
次私り毎にえおるんせさるる名  
のり井 改 切多井筒は流あり  
の橋よりや西の柱柱のいま  
とに岩を中へいんを係跡なる藤  
九代目と名あつるとの種なる  
も流く未ださるる思道も  
悔と云く一度目出校初まの  
川の流きよと名あつる後  
古今の稀人秋後始乃  
めでたきと納む小

改





安政三  
丁辰春

後者愛國花  
江下

各古  
白  
舟  
海

手多 13  
△ 639  
34



門ナ 13  
葉  
卷

役者西行宛

長發評を書名新



去々役室西女形

一席の行烈

中々ひと徒堂と

とくつたやことを

去々傘多身其の

身屋美人と

名の毛の役者とも

捨人とも夏も有

五

五



只氣の道と長刀の

楯とりのよと物とを

玉找とらしと多の鉄炮てつぱうの

核ことりとやとあとまの

福ふくひとふとらとけ

具負尖馬ひのき ひとこあり

六の路のまけな

申まとらとけとも

とらとらとらと見と物の

御みとかとけとけ

名を渡紙を多指物後若目録

若多多葉 名代松本左衛門を所  
を文元中村左衛門

橋岡多葉 名代山城左衛門を所  
を文元橋上左衛門

△りる尾府名町多の如

▲客座

至上吉 尾上左衛門

初てのり出勤十五分はあつ社

▲三枝之部

至上吉 尾上松壽

くらとらとらと出と勤と分と初と見と座

至上吉 濱尾徳三郎

いあり多のり多れても多の如

至上吉 尾上新七



上上

中村権十郎

一寸見たりしは、此の勢の

中村梅造

市川宗茂

中村政隆

谷からゆきくしの源川系

淡尾淡三郎

尾上三右

中村善次

淡尾園十郎

市川小宗

市川新造

市川兼持

中村松介

上上

上上

▲実悪歌後外之部

おまのま出精てふかち川流

中出又次郎

別ら女中がらいおらがる東宮様

上上

淡尾園又次郎

淋しの妻がらん西の極楽

上上

市川黒様

寄おとけりて放念と大須

中村善次郎

市川宗茂

中村松介

市川宗茂

上上



尾上初縁

多敷子ぶくろの七寺

松平御高

関三九郎

中村門三

貞徳又郎

市川夜西院

浅尾大車

松平徳又郎

市川多藤様

市川清又郎

尾上初十郎

いづれも咲出〜中松又郎

若女形之助

尾上いぢは

上上

上上

どろり舞臺結構言八車山

市川鯉之丞

さ〜半の浮利も中村清又郎

上上

市川様之丞

あはれ女形又〜中村清又郎

岩井南窓

尾上栄三郎

尾上梅久

市川清又郎

市川三郎

いづれも咲出〜中松又郎

中村うら

所長初彦

貞徳女三

冥松代

上上

上上



中村のしほ

市川春之助

岩本春之助

尾上輝三郎

これらもくあつた事の内山

▲角安藤形子没之部

市川お久平

片岡清之助

尾上より松

岩本栄吉

浅尾金次郎

中村小芝

浅尾花若

三外浅次郎

市川徳助

▲惣後見

大極書

市川海老蔵別号

松本春之助

日のたみと頼む光の坊金蔵

頭取之部

岩本千郎

尾上松丸

尾上清運寛

板東秀若

▲担任他老之部

奈河政助養 三外や徳助様

岩本松若日 三外や春若日

姿見赤助日 岩本良助日

岩本若徳日

千穂万葉系大付







袖をかきうぬ物乃よりたぬ  
ひまもさるたふ乃今おもくげ成  
之亦ととさのてもうきしん

遊様しや

久松の三平いづれもさまひかひてこそ成

ふふりおの隠る様は表まとのま

役もく思来に舞巻よ身を入て経進

又巻うけ者の別とと六膳ののてりお

これが清ひひさの方様人見く一筋人の

圓のやておと成りお成りや成り

上上

大谷廣孝

お成りよとされまことと後大坂表にお

ゆりあて西方は赤巻は山空勤とこれ

おとと小町のいりるをりお咬いやく

おとと小町のいりるをりお咬いやく

おとと小町のいりるをりお咬いやく

おとと小町のいりるをりお咬いやく

上上吉 尾上喜多助

おとと小町のいりるをりお咬いやく

おとと小町のいりるをりお咬いやく



此出動の苦小し者扱も出ずしと亦俄の  
 九月向して景公節女と号するをとお成  
 孫会孫孫と亦其の後小のよりお成八  
 代目女は國なる大後夜出より去三の勢  
 色破地より出動をねが野州衣布並衣の  
 此出動破地でも許すまより去六の八の若  
 まま其入の出動より目身位と七獵師女が  
 突の赤松老節女がのさ戸白猿は猿猪女  
 三人のさより目身位と七刀柄鏡鏡ひれと  
 一歳月担去並佛殿乳人改忌や<sup>刀物衣</sup>  
 碧万場大園の去並勤とる人守と七<sup>並</sup>  
 奴獲の方も兼たれい公女あそとて中  
 さびた<sup>く</sup>て万端久しんてつれと大並其  
 く<sup>く</sup>と<sup>く</sup>後並其あすの秋のあおが八  
 波のまはるやれも持毛其秋を去と

二子とる園ハ長くまらめをうてあすれ  
 それ合並れあすれや松の死骸とて死  
 七をこゝろ年可年約とて海かり  
 命この<sup>く</sup>刀物一鏡鏡ひれと<sup>刀物</sup>  
 ありあすれ終初とてま<sup>く</sup>場あすれ  
 身あてた初若の目あすれあすれあ  
 ころ<sup>く</sup>あすれ<sup>く</sup>在年改忌とてとや  
 并<sup>く</sup>場<sup>く</sup>二<sup>く</sup>年<sup>く</sup>合<sup>く</sup>並<sup>く</sup>終<sup>く</sup>并<sup>く</sup>持<sup>く</sup>の<sup>く</sup>吸<sup>く</sup>  
 飛よと<sup>く</sup>為<sup>く</sup>付<sup>く</sup>る<sup>く</sup>仕<sup>く</sup>内<sup>く</sup>立<sup>く</sup>後<sup>く</sup>と<sup>く</sup>女<sup>く</sup>形<sup>く</sup>の<sup>く</sup>  
 身<sup>く</sup>の<sup>く</sup>り<sup>く</sup>り<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>中<sup>く</sup>く<sup>く</sup>り<sup>く</sup>ん<sup>く</sup>と<sup>く</sup>去<sup>く</sup>と<sup>く</sup>去<sup>く</sup>と<sup>く</sup>  
 七<sup>く</sup>出<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>り<sup>く</sup>ハ<sup>く</sup>不<sup>く</sup>交<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>ふ<sup>く</sup>り<sup>く</sup>并<sup>く</sup>と<sup>く</sup>豆<sup>く</sup>腐<sup>く</sup>  
 登<sup>く</sup>の<sup>く</sup>腹<sup>く</sup>累<sup>く</sup>殺<sup>く</sup>た<sup>く</sup>よ<sup>く</sup>の<sup>く</sup>出<sup>く</sup>場<sup>く</sup>と<sup>く</sup>ね  
 あるを<sup>く</sup>ち<sup>く</sup>并<sup>く</sup>と<sup>く</sup>初<sup>く</sup>七<sup>く</sup>は<sup>く</sup>納<sup>く</sup>川<sup>く</sup>と<sup>く</sup>初<sup>く</sup>て  
 の<sup>く</sup>さ<sup>く</sup>り<sup>く</sup>を<sup>く</sup>と<sup>く</sup>俤<sup>く</sup>く<sup>く</sup>並<sup>く</sup>二<sup>く</sup>年<sup>く</sup>の<sup>く</sup>身<sup>く</sup>の<sup>く</sup>  
 七<sup>く</sup>具<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>よ<sup>く</sup>の<sup>く</sup>身<sup>く</sup>が<sup>く</sup>り<sup>く</sup>め<sup>く</sup>と<sup>く</sup>七<sup>く</sup>り<sup>く</sup>并<sup>く</sup>と



とめいよお家柄で幽霊のりんふ物  
てのり外呪はか三人のおりふはる  
かれ年ぶらえあれうごてとせ  
由又行分せきの聖の子らう放何トヤ  
中とてくして担き光がぬきせ結念く  
既切浮名横様おとあや器葉  
此ふ出分又限入ごころ外之行先  
指香木の音あつと核別お物よと  
中外と既金器うつごの障とおきや  
ひかあとかり一世孫女坊のりう万端  
よく仕内もお意ごあされお切お障  
久松竹川や五物あうお障うけ六  
中分の二や七まのお六是とてお指  
まのおやめのきうとらうを既葉  
波やの浪もた七拾ときせてらひの

助は私のいえお仕切とうらはたく  
白とてこらの内とトハハハお仕切とび  
中と既後うらあくトリ白様出  
赤とを想とうて送入くるおめとふ  
てう外と行はあれ障は出勤中音  
障やくと障が加る外とお仕切とらう  
中外折とあままの既後一夜出勤  
有てもやららると結ておう中外を  
ヤレユチラキまらる列

▲之役之部

上上吉 尾上松壽

既扱はまの内地を六別して以七キ  
厚九法政の親方七の外折ヤレ  
結てあまの外既後一夜出勤  
ヤレユチラキまらる列



万端中分也 [又物] 未得あ代最日毒  
業と須念下と去の鬼也小教出ると  
玄後引受之後中子小教切るを  
めりてをり也といやふかあへ松壽  
出るなり并 [切] 二や鬼と智恵因大  
きと評よく二やさう教や三よお因らと  
しとよあつ也と [改] 玄後引受は出  
勅有之と思ひの并は辨州森名  
以出勅被地をも評よく出分おゆり也  
こより若く是も我を評よく出勅あり  
評よく是も我を評よく出勅あり  
[又] 二考漢路をく  
上吉 浅尾徳三帝  
[又] 二考漢路をく  
勅忠孝養三街出らういふと勅あり

小評よく是後辨及以出勅其分濃  
及路以出勅いれりをも評よく以位念  
心分并 [又] 二考漢路をく  
上吉 尾上新七  
[又] 二考漢路をく  
いふと大やとわ勅及分白猿出いり  
お後辨及路を因らと去六日業  
御座は箱川谷籠や去小評よく  
並らり後其の錦も市成多を深  
久松久徳是とをも評よく [編] 志り  
を以二白を以と蘇抹と去是行也  
も亦評よく并以是の思存也  
大切とせばは成事ぬ以出教く

▲ 奥西教被外之勅  
上吉 中山文系







作の通うの七梅ある竹も南も  
病はくともめであまの切き月若  
多き形か出動の目見はる小橋  
師本八七実の赤松三帝ありあひく  
別る家十八邊村の柱も元物統  
脱びまゝの 三 葉の御座は妹は  
此殿の辰 三 ちりりか野やるか後葉茶  
本つのもくあての依は用とくお松とあふ  
子りく富さあまか付一統とあふ  
三 葉 ありき 是の八はと遠の路の  
妹も費用がたふ年とどう岩後の中ふ  
思ひまゝ 三 物 二や仁本路は花たよの  
出るまうはあ村ふんはとあ敷のなや  
と市まゝ 三 葉 名をなすはあをた  
あはるる藤をばり 三 葉 小後とあ

いぢけさうかれとばあのはな八梅あり  
あ和泉下とふとあまき梅ありあひ  
付はさるんはと先は年路はあ梅と  
初らばわたりはまああ 三 葉  
流那後二限目 三 葉 名をなすはあ  
別る小八邊内新言玉物 三 葉  
はとあ 三 葉 切は月路はあ梅  
と梅は 三 葉 ありと梅名はあ梅とあ  
あ 三 葉 名をなすはあ梅とあ  
はとあ 三 葉 名をなすはあ梅とあ  
久松 三 葉 名をなすはあ梅とあ  
か 三 葉 名をなすはあ梅とあ  
ひ 三 葉 名をなすはあ梅とあ  
か 三 葉 名をなすはあ梅とあ  
天 三 葉 名をなすはあ梅とあ



名は天皇の姓とのみならず、新のこ  
ひをめて梅の多光とありけり、  
お統久人（さし）親我と云ふこと  
洋橋をたてしは、いふ所く、ま  
やふのち、あつらひ、いふこと  
おき、いふこと、あつらひ、いふこと  
まは、あつらひ、いふこと、あつらひ  
く **【E】**キヤレ本場の親をく

後者も月花流紙のまじり

江戸三度物惣後者目録

後者目録 中村助三座

同 二所目 市村勝太郎の

同 三所目 河原清権下座

△いんをいん名取く、いんをいん

▲五段巻頭

大上書 貴騰寛

とありても五段の女く、いんをいん

▲花方二幅対

至書 所園秋重

大板でもいんをいんをいんをいん

至書 市川小園流

おは、あつらひ、いんをいんをいん

▲五段之部

真書 貴者三席







九代目小あきとらとらうおき山

▲巻 抽

卯吉 本林田勘弥

川島中あきとらとらうおきと不忠池

▲実徳院後道外之部

吉吉 大谷友太郎

大印元とらと実徳の王子

吉吉 浅尾奥山

けおんがゆとらと山山の宿

吉吉 浅尾興六

藤の仕向とらとら湯房

吉吉 中村徳徳

西條のとうけとら万代の亀井

吉吉 中山市徳

くふとら糸巻とらとら徳

上吉 中村徳太郎

とらとら世とらとらとら徳

上吉 関 敬 助

いしでも 意巻とらとら徳

大谷徳次

中村徳徳

板東村太郎

松本徳太郎

板東大次郎

市川大次郎

所巻徳太郎

岸巻徳太郎

相巻徳太郎

中山元徳

松本徳太郎

上



坂东又八  
中村康太郎  
中村成茂

宝物公認中入と題をてき

中村イ茂  
松本武良郎  
成田屋敷三郎  
尾上入茂  
尾上多目茂  
中村相茂  
市川小太夫  
中村勝茂  
尾上小の茂  
寛政六  
坂东舞助

上上

尾上らの助

格別又味ひもろの園子坂

▲若女歌客座

上上吉 尾上景太郎

大坂の御所の色七様御前が京

▲若女歌之部

上上吉 尾上景太郎

まかやあざけ小什向と深川

上上吉 中村大老

久がりのお出で鳴りより鈴ヶ巻

上上吉 岩井条三郎

美しめは上乃るん 園崎安夫

上上吉 市川團三郎

あまのまを女内切がまの目立

上上吉 多喜市景



藤乃仕内か人物をナリ赤坂

上上

嵐小六

のまのときのもるより斗込

瀬川乙女

中村談笑之態

坂本亮子三

尾上秋柳

中村芝翫

上上

いづれもわらわら〜と取川

岩井志げ松

岩井采女席

松本ゆき

岩井やま電

尾上光次席

尾上五三席

上上

岩井梅老

岩井やま電

市川三三三

先今此内々女々この下谷

▲子役之部

市村越前守

岡花女

坂本春彦

市村竹松

栗田又市

系者文彦等

と船ともま若丸乃小塚宗

▲後見

極上書

坂本春彦之席

流しも流死大いむ社長徳田



頭取之部

坂本橋千席

横谷七九席

三條初吉席

中村茂文席

在言仕老之部

三升屋三三次

勝見調三

河竹新七

櫻田治助

篠田辰助

梅森春助

坂本春吉席

市岡和助

千本橋万本末六く村

安政三年九月六日 古川彦治 記

秀乃 與言 實山 信士

行年 四十二 七

至正言 坂東 志乃

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園

いふ事と成る方、案が園















ありおんうらとく仙てつ神たりのは若者  
 徳をたむ神た八代何か死んてと権別  
 孫おがまふ成す私も八代といふも  
 生をうよ **抄** 十二をたむかひも  
 神杖者も八代何か神といふも  
 又 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 飛を神のさう成神をまふ  
 中村神ら飛若者清の法を  
 されい初坊さんつと権別法事  
 つもと見 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 と若あつまふ **抄** 東あく徳くかあつまう  
 若うは後ろ名す **抄** 東あく徳くかあつまう  
 それら流重き **抄** 東あく徳くかあつまう  
 切キ **抄** 東あく徳くかあつまう  
 後破れ **抄** 東あく徳くかあつまう

初かたり物中神あつまう  
 ねと法界坊の中と法界坊  
 雲の果と見 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 ごと見 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 加の併 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 桑 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 言 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 眼 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 多 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 見 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 亦 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 の **抄** 東あく徳くかあつまう  
 目 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 甘 **抄** 東あく徳くかあつまう  
 の **抄** 東あく徳くかあつまう











との和藤も二つも出物七二も一俵がよ  
 うとて **凡物** さんま小杉でもうこのふ  
 せりふり合ふらふまか **名物** 小南の史  
 物も小ま利さうよま六遠ひの并取  
 かどうさると山まがらうそそ藤巻を  
 さく成れまもあはけかうとをさ  
 くあうとあうさうのてあま併  
 沈切の味をさうの内は彼もふま  
 御食はうま并さうと成あふあ  
 寸容がさうして申うていれんを  
 めの **名物** 浮舟まきと御舟もさ  
 牛し **名物** 旭うやううてわん  
 おんの神のまは先進子らうあ  
 のあうううあう并さうとあ  
 いひ **名物** **凡物** 何れ尚時大のさ

は業物おんを并ゆ後でも月並  
 存に位をれぬい程方と多魚船の  
 二風三の早船かど出雲の元程藤  
 尖も及ぬらおこれらの俵はま  
 又のひ並并どあうも服さあ  
 をとああ **凡物** **凡物** ヤレ取天所の  
 費らうらう **凡物** 川

▲五役之部

真主吉  嵐表三帝

**凡物** 扱ひ要圖海也史の血脈藤并共  
 夕并 **凡物** 凡物七徳 **凡物** 五書三  
 取巻藤藤藤藤藤藤藤藤藤藤藤藤  
 右の三役別ら史史史史史史史史  
 中と史史史史史史史史史史史史  
 史史史史史史史史史史史史史史







の奥より十月二十日、軍勢をあらわす  
 刀の切者の目より、と伯母の園三文字の  
 りより、まゝの料に金も亦、味のかた  
 り、并に今、おのれ、あつた、あつた、あつた  
 あり、入る、あつた、あつた、あつた、あつた  
 喜、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 致、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

上上吉 (飛) 坂東行三篇

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 今、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 并、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 ぞ、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 お、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 指、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

てあつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 う、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 合、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 人、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 張、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

二、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 智、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

三、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 猫、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 の、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 亦、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 鞆、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 今、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
 此、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた











其の好 江戸移り及東路ありて娘のそと  
得く別 秩者史小東次郎の東を  
とどろき穿りて出て来りて此の山の中  
あはれに啼く悦びあり **正業** かくき  
腹にけりて入るるも **正業** かくき  
おしと史ありて **正業** かくき  
入るるも **正業** かくき  
中 **正業** かくき  
さめしき **正業** かくき

▲実政欲殺し御

上上吉 ⊕ 大谷女史の

**改元** 昭名史と井三自淺様御  
お花助史史の隆御史と併くあつた  
追善とて花史御史と史史御史と

加後おのり大と西の月移り四言史也若女  
史指し力とて **正業** かくき  
井 **正業** かくき  
村や史切後を **正業** かくき  
手 **正業** かくき  
けり **正業** かくき  
多 **正業** かくき  
と **正業** かくき  
友 **正業** かくき  
お **正業** かくき  
起 **正業** かくき  
△ **正業** かくき

▲若女歌客史

上上吉 ⊕ 尾上史史

**改元** 昭名史と史史御史と



















後二刀の浦幕切を伴うてあうは  
 幕切のりとも太夫共助と縁がら  
 一よりの幕切といふ状を死て生後  
 迄入仕者も幕切に成り水共のど  
 思ひ分ちるが拍あは様と申うご  
 ちこの場さうさどお酒やの辰紙後の  
 白紙の神とい有れと幕切共をえ  
 のあはるべし何もふそふあう林と  
 見物あうあう目ら民討の花方  
 我輩共と強合共舞をとも満は  
 見置我輩共共男まはは花中  
 見物が候共教へてうもあも教へ  
 のふのりともいふと下坂の名舞の徳  
 心かおとといふ所神とい情をも  
 思入共と舞へおあてうの歌まは又

歌五共とてうん仕共とよ  
 とう我輩共と強合とも祥と異中  
 の大入共共の徳と  
 祥とあうあうあうの地震中  
 のやと混雑中よりあははあくと  
 喜共とてうりやあ先は表三  
 共共の共祥も喜舞あはと  
 とめあう我輩共の舞共とあ  
 て候共様若所共の始の辰紙と  
 目出候や納共

作者 長文舎三都子

作 浪中 四文入吉良丸

者 浪中 東山真花泉 辰樂舎の蝶 都 共井の様

波着名は浪中



大坂書林

河内屋平七

京都書林

吉野屋勘兵衛

名古屋書林

金銅屋米藏





